まじわり 140 号

2011 年 12 月 25 日発行

【巻頭言】『私は初めであり終わりである』

司祭　バルナバ　菅原裕治

イザヤ書第 40 章 6～23 節

イザヤ書の 40 章から一般的に第二イザヤと呼びます。第二イザヤではバビロン捕囚からの解放のメッセージが続きます。神様に対して不義であり国家の滅亡という災いを経験したイスラエルが、神から恵みと立ち返りの機会を与えられるということです。その際に、ペルシアの王・外国の王であるキュロスが救い主・メシアとして認識されていたということはすでに見てきた通りです。ここでは神様が自分自身について表明しています。

*

44 章 6 節で主なる神様は次のように述べます。

イスラエルの王である主、イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。

わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はない。

「イスラエルの王である主」、イスラエルには支配者である人間の王たちがいましたが、本当の支配者は主なる神様です。主なる神様がいるからこそ、人間が王としてその代りに存在できたのです。

「イスラエルを贖うのは万軍の主」、イスラエルには神殿があり祭儀があり祭司がおり、そこで罪の贖いがなされる。しかし、本当にイスラエルを贖う方は、万軍の主なる神様である。王の場合と同じように、地上の神殿が、人間の罪を贖う機能があるのは、また祭司が人々の罪を贖う役割を担うことができるのは、すべて主なる神様が贖う方だからであるということです。

「わたしは初めであり、終わりである」、主なる神は、支配者としてまた贖い主として空間的に存在するだけではなく、初めと終わりとして存在します。つまり時間と空間のすべてであることが明言されています。

「わたしをおいて神はない」、最後に、そのような主なる神様は他の神々と比較

することはできないことが明確に示されます。そのことは七節の「だれか、わたしに並ぶ者がいるなら声をあげ、発言し、わたしと競ってみよ」という言葉にも表れています。

これらの神様の自己表明は、当たり前と言えば当たり前の根本的な事柄なのですが、イスラエルで権力を持つ王や指導者たち、宗教的な権威を持つ祭司たちは、その根本を忘れてしまったのです。その意味では、この神様の自己表明は、イエス様の時代の宗教的指導者たちに対しても、そして現代の聖職と呼ばれる人々にとっても、本当に示唆深い事柄であると思います。

*

小さな民の集まりに過ぎないイスラエルが国家として存在し、列強に囲まれながらも豊かに存在しえたのは、イスラエルの主が神様であり、イスラエルは主なる神様のものであったからでした。しかし、イスラエルの人々は、そのことを忘れてしまったのです。その結果が国家の南北分裂とそれぞれの滅亡、さらにバビロン捕囚でした。捕囚を終了させた神様は、改めてそのことをイスラエルの人々に預言者を通して語っているのです。

イスラエルの人々が、主なる神様のことを忘れてしまった理由は、端的に言って主なる神ではなく、人間が創造する対象を信頼してしまったことです。そのことが9節から続く偶像礼拝に対する批判として象徴的に表れています。

*

「偶像を形づくる者は皆、無力で彼らが慕うものも役に立たない。彼ら自身が証人だ」

ここで言う偶像は、主なる神様ではない他の宗教の神々を模った偶像のことですが、単にそのような宗教的なシンボルとしての意味だけではありません。力強い指導者や、政治的あるいは軍事的な同盟関係、経済的な豊かさなど、人間が強さや豊かさや安定さを形作ることができるありとあらゆる事柄が含まれています。

言うならば、この時代の偶像として模られる神々は、そのような人間の願望・欲望に合わせた意味を持つ存在であったのです。それらは人の目には何とも頼もしく、また輝かしく見えても、神ではない。無力な偶像に過ぎないのです。

*

宗教的な偶像が、それほど強い存在ではない現代社会においても、同じようなシンボルは存在すると思います。現代の方が却ってその存在がわかりにくいかもしれません。一概には言えませんが、現代社会が作り出す豊かな文明が、そのような存在かもしれません。そもそも狩猟や農耕に始まる人間の文明は、人間にとって非常に大事な事柄であり、人間を具体的な喜びへと導きます。しかし、それらは同時に常に自然体系を破壊する要素を持っています。人間が生きる上で重要な狩猟も農耕も過剰に行われた場合、自然環境を滅ぼしてしまうのです。人間が作り出す文明が、自然の一部である人間自体を滅ぼしてしまうのです。産業革命以降、機械によって人間がいわゆるマンパワー以上の力を発揮できるようになってからはなおさらです。

*

それ故、主なる神様が、時間と空間を超えてイスラエルの主として存在し、また贖う者であるという概念は、イザヤ書を与えられたイスラエルの人々に対してだけではなく、今日のキリスト者である私たちを含めて、人間が人間である以上、現代の人間も未来の人間も、忘れてはならない事柄なのです。

*

豊かな文明という事柄は、決して悪いことではありません。しかし、それを導き支

配する概念が人間のエゴであるとき、その先にあるのは滅びにほかなりません。滅びに至らないまでも、人間は、主なる神様が人間を豊かな存在として創られたことを忘れ、自分たちが想像する有限かつ無力なものに囲まれ、自分自身を貧しくしてしまうのです。しかし、主なる神様は、そのような人間との関係を回復することを望んでおられるのです。

*

「出エジプト」という概念があります。エジプトで囚われ人であったイスラエルの民を、主なる神様が導くという現象です。イスラエルの人々にとって救いの基盤とも考えられます。しかし、エジプトは、貧しい土地ではなく、非常に豊かな土地でした。そこで産出される農作物は、地中海の穀物倉庫といわれるほどです。エジプト・ナイル両岸の土地は、豊かな「黒土」なのです。他方イスラエルの土地は、貧しい「赤土」です。農業には向かない土です。この貧しい土から創世記に書かれている通り、アダムが造られました。つまり出エジプトとは、作物豊かな土地から主なる神様の呼掛けに応じて、貧しい土地へと向かうことに他ならないのです。経済的な貧しさが、即精神的あるいは宗教的豊かさではありません。しかし、誰がこの世界を創造し、また支え導いているかを忘れた豊かさは、本当の喜びへと人間を導きません。

*

最初から最後まで支配しておられる神様のことを忘れないという緊張感を持って、またその神様に支えられているという安心感を持って、これからも歩んでいきたいと思います。